

一〇二三年一月一七日

北風吹いて白雲迅き遠嶺かな
藁屋根を見下ろしてをる木守柿
好物の芋煮を供へ夫偲ぶ
園はいま銀杏黄葉のパラダイス
冬日射揉みて煌めく早瀬かな
凛として寒菊薰る仏間かな
堆き銀杏黄葉に埋まる徑
残照の海辺に群るる冬かもめ

素秀
よし子
たか子
たか子
満天
こすもす
たか子
康子
千鶴子
あひる
あひる

一〇二三年一月一二日

枯螳螂縋りつきをる日向窓
山襞を埋め留まる冬の霧
光芒をなす竹林の冬日差し
冬雲にとどく煙や登り窓
七竈燃え立つ森のレストラン
茫茫々と平城宮跡冬芒
山越えの遍路の道に奴草
干柿の簾を透けて居間明かり

素秀
明日香
愛正子
もとこ
かえる

一〇二三年一月一一日

菊に立つ今日より後期高齢者
今日の冷え遺影に語り窓閉める
この森もキャンバスといふ北狐

せいじ
たか子
むべ

一〇二三年一月一四日

レースなき馬場を席巻椋鳥の群
一〇二三年一月一五日

素秀
みきお

毎日旬会みのる選・一〇二三年一月一九日

猫パンチふわりと躲し雪螢
手のひらに胎の温もり寒卵
一〇二三年一月一四日

澄康千鶴子
康子
明日香

枯鶴頭焚くや炎のまた赤く
鈴掛けの紅葉かつ散る並木道
序破急と池に散り込む風落葉
白障子貫いてくる日差しかな
木々の影斑に絡む縁小春

白骨の風倒木や冬河原